

イワシ類シラスの漁場形成の研究

(我が国周辺漁業資源調査)

(予算区分 受託 研究期間 平成7年度～)

担当：資源海洋科 高田伸二

【研究の背景とねらい】

静岡県におけるイワシ類シラスの水揚金額は年間40億円を超えており、沿岸漁業で最も重要な魚種の一つです。イワシ類シラスについて水揚統計資料の収集や卵稚仔の分布などの生物学的特徴を把握することで、シラス水揚量の変動特性、漁場来遊群の大きさと沿岸海況の短期変動との関係について検討し、最終的には、シラス漁場形成機構を解明します。

【これまでに得られた成果】

(平成29年度の状況)

- 平成29年度漁期(平成29年3月～平成30年1月)の主要6港(静岡、吉田、御前崎、遠州、舞阪、新居)における総水揚量は4,557トンで、前年(7,659トン)の60%、過去5ヶ年平均(以下、平年)(7,768トン)の59%と、前年及び平年を大きく下回りました。
- 平成29年度漁期は4月以降に水揚量が増加し、5月に本漁期における最大のピークとなりました。6月に水揚量は減少し、7～9月の夏季は低調に推移しましたが、夏季に水揚量が少ないのは近年に共通の傾向です。例年では10月以降の秋季に水揚量が回復しますが、本漁期は漁期終了まで低調のままでした。この秋季の不漁が大きく影響し、本漁期の総水揚量も前年及び平年を大きく下回ることになりました。
- また主要6港では春季に水揚量のピークとなりましたが、静浦等の湾奥の地域では期間を通して水揚量は低調でした。この水揚量の地域差は、春季を通して湾内の冷たい水塊が壁となり、湾奥の漁場にはシラスが補給されなかったためだと考えられます。
- シラス漁況の長期(3ヵ月)予測を行うとともに、調査船を用いた漁場加入前のシラスの採集調査によるシラス漁況の短期予測を試み、その結果を漁業者に広報しました。
- 今漁期の魚種別の漁況は、3、4月はマシラスがほぼ100%を占める特徴的な漁況でした。これは静岡県の沖合に極めて多くのマイワシ親魚が来遊し産卵した一方で、カタクチワシ親魚の成熟・産卵が抑制されたためだと考えられます。

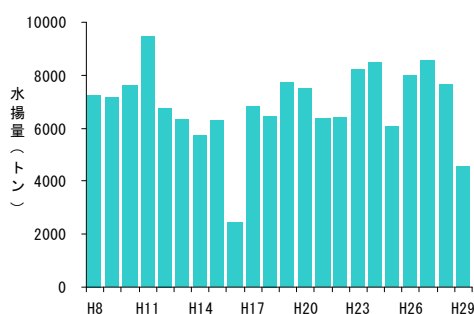


図1 県内主要6港における年度別水揚量

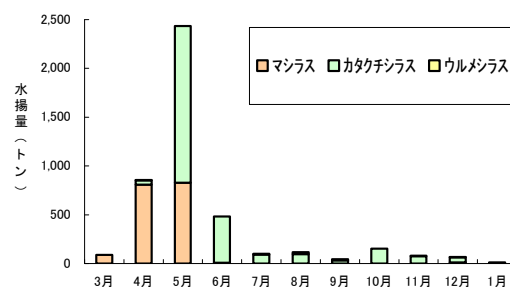


図2 県内主要6港における平成29年度の月別魚種別水揚量

【期待される効果】

- シラス漁場形成機構が解明され、漁場や漁況の予測が可能になれば、シラス漁業者は計画的な操業が、シラス加工業者は在庫管理等の面で計画的な経営が可能となります。

【今後の計画】

- 漁場加入前のイワシ類シラス採集調査を継続し、種組成や分布状態などを明らかにし、漁場加入に至るまでの機構やシラス漁況との関連について検討します。
- 漁場来遊量と海況との関係を明らかにし、シラス漁況の短期予測手法を確立します。

(作成 平成30年4月)